学 位 論 文 審 査 の 要 旨

		要　　旨
学位申請者	平山　紫帆 【比較社会文化学専攻　平成28年度生】	本研究は、非母語話者とのコミュニケーションにおける母語話者の調整方法の１つである「くり返し」に注目し、その調整の仕方を明らかにすることを目的とした。そのために、接触場面と母語場面の母語話者のくり返しを分析し、非母語話者との日常的な接触経験の多寡によって日本語レベルが異なる相手へのくり返しに違いが見られるかを探った。 本研究は４つの研究で構成される。研究１では、相手発話のくり返しの現れ方として「生起数」「出現形式」「出現位置」「自発性」に注目した。研究２では、相手発話のくり返しの機能として「くり返しそのものの機能」と「談話展開上の機能」に着目した。研究３では、自己発話のくり返しの現れ方を明らかにするために、「くり返しの生起数」「出現形式」「出現位置」「自発性」について分析した。研究４では、自己発話のくり返しの機能に注目し、「くり返しそのものの機能」と「談話展開上の機能」を分析した。 その結果、経験の多い母語話者は相手の日本語レベルによってくり返しを使い分け、日本語レベルの低い中級学習者に対してくり返しを頻用し、くり返しであることが明白な形式を使用し、情報を明確にしたり一体感を促進したりするくり返しを多用していたが、経験の少ない母語話者は相手からの明らかな反応要求のある場合以外は相手に応じた使い分けをほとんど見せないことが明らかになった。 この結果をコミュニケーション・アコモデーション理論を用いて認知的・心理的な違いから、母語話者のくり返しには接触経験の多寡や相手の日本語レベルによる違いが生まれていると分析した。審査会では、接触場面の母語話者のくり返しと接触経験や相手の日本語レベルとの関係を明らかにし、総合的に説明した点が評価された。しかし、統計結果の説明、教育への応用についての記述について修正すべき点があることが指摘された。申請者がこれらの要求に十分に応えた修正版を作成したことを確認した後、最終審査に進むことを決定した。 公開発表会では重要な点を簡潔にまとめた分かりやすい発表が行われ、参加者や審査委員の質問にも真摯な姿勢で的確な応答が見られた。 以上によって審査委員会は、博士（人文科学）（Ph. D. in Applied Linguistics）の学位授与に相当すると判断し、合格とした。
論文題目	接触場面と母語場面における母語話者のくり返しに関する研究　―日常的な接触経験と対話者の日本語レベルの観点から―	
審査委員	（主査）　教授　　佐々木　泰子	
	准教授　西川　朋美	
	准教授　山腰　京子	
	准教授　小松　祐子	
	助教　　本林　響子	
インターネット公表	○　学位論文の全文公表の可否（　可　・　㊟　）	
	○　「否」の場合の理由 ア．当該論文に立体形状による表現を含む イ．著作権や個人情報に係る制約がある ウ．出版刊行されている、もしくは予定されている ㋓．学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている オ．特許の申請がある、もしくは予定されている	
	※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について	